

ならないんだから、と斜に構えてあきらめの気持ちでとらえているでしょう。確かにそうでしょう。平和なんてきれいごとだけで来るわけがない。でも、やはり裏切られても、裏切られても私たちは平和を求め続けるんだ、という気持ちを持つことは、小さな者である私たちが悪意に「負けない」唯一の方法だと思っております。

この話を書いたシナリオライター市川森一さんはその半年前にも「ゴルゴダと呼ばれる、されこの形の星に集められたウルトラマンたちが十字架で磔になり、地球にはバラバという名前の怪獣が解き放たれ、前の日までウルトラマンをたたえていた地球人たちは地球にぶつかろうとするゴルゴダをさっさとウルトラマンごと爆破しようとする。」という話で、信頼と裏切りについて書いていますから、今紹介した最終話もたぶんキリストの受難を意識したと思われる。

そのとき、ペトロがみもとに来て言った。「主よ、兄弟が私に対して罪を犯したばあい何度ま

で許すべきでしょうか。七度まででしょうか。」イエスは言われた。「七度まで、などと私は言いません。七度を七十倍するまでと言います。」(マタイ十八・二一〜二二)

ご存知のようにシモン・ペトロはこの後、受難の際、三度キリストを知らないと言います。キリストはそれを知っていたけれど彼を信頼し続け、その信頼は最終的には彼を大きく変えたのだと思うのです。



『「復活おめでとう」
「ういいます」』

マリア 坂井 民子

今から三年前、再発を宣告された主人と、この教会を訪れたのがイエス様との出会いの始まりです。主人は三ヶ月後に満開の桜と共にイエス様のもとに旅たつてしまいました。その後、私は心温かい人々に恵まれ、昨年洗礼を受けることができ、神の子として生まれ変わり、とても嬉しく思っております。最近はずから苦痛に耐え、身代わりになって、赦して下さるイエス様の愛に触れた時、私自身が受け入れられている安らぎと希望を感じています。

愛といえば、昨年は世相漢字に「愛」という字が選ばれましたが、「愛」の大切さ、必要性を感じながらも、反対に重大な事件等が起これ、「愛」の欠如も感じられ、この字が選ばれたそうです。人にとって「愛」は家族、恋人だけに向けられるのではなく、周りを取り囲むすべての人々に向けていることが大切なのではないでしょうか。

一人一人が「愛」を忘れず、心にとめ、祈りを捧げる事によって、穏やかな世の中が創られていくのではないかと思います。そういう私も仕事で、忙しかったり、自分に余裕がないと、ついつい周りの人に対して、ぶつきらばうな態度に出てしまうことがあります。

マザーテレサの「多くの人を愛し、ミサを通して自分が愛されている。だからまた、人々を愛する仕事に出かけてゆく」は、私のとても好きな言葉です。神様に愛されていることを感謝して受け止めるだけでなく、世界中のどの人にもお恵みがありますように、祈りつづけていきたいと思っております。

ここで私の愛を感じたお話を一つさせて下さい。

木枯らしの吹く、一月末のある午後のことです。一人の老人が来局し「家内が大変お世話になりましたが、他界しました。ありがとうございました」と頭を下げられました。私が十三年の間、お薬を調剤している患者さんです。奥様